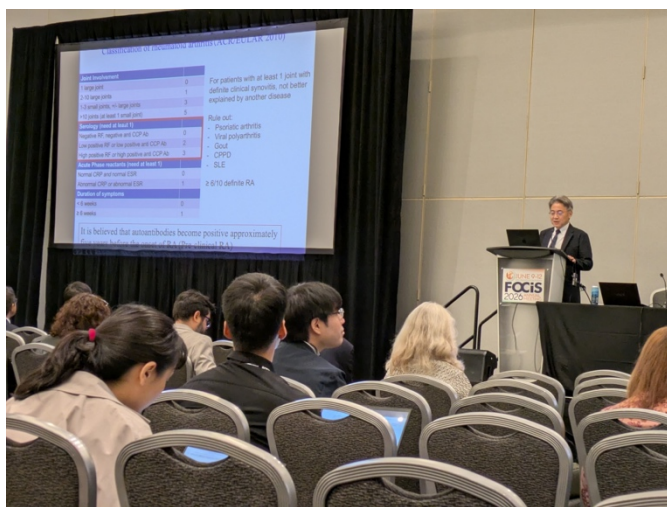


FOCIS 2026 Annual Meeting 参加報告書

文責： 浅島弘充

2026年6月9日から12日まで、米国サンフランシスコのSan Francisco Marriott Marquisにて開催されたFOCIS 2026 Annual Meetingに参加した。当科からは松本功教授、佐藤亮太助教、浅島の3人が参加した。FOCISは、基礎免疫学と臨床免疫学を橋渡しするtranslational immunologyを主題とした国際学会であり、自己免疫疾患、感染症、腫瘍免疫、移植免疫、免疫不全、ワクチン、免疫治療など、疾患領域を横断した免疫学的理解と治療開発を議論する場である。本年度は第26回年次学術集会として開催され、50か国以上の国から研究者・臨床医が参加したとされる国際性の高い学会であった。また、11のMember Society Symposium、20を超えるセッション、300題以上のポスター発表が行われ、基礎研究から臨床応用まで幅広い内容が扱われた。

本学会では、自己免疫疾患や各種癌における治療標的の同定、新規治療法に関する演題が多くみられた。特にCAR-T細胞療法やbi (tri) specific antibodyなど、新しい治療モダリティに関する報告が目立った。また、組織局所の免疫微小環境に関する発表も多く、腸管、腫瘍、胎盤、移植臓器などを対象に、単一細胞解析、空間解析、オルガノイド解析などを組み合わせ、各細胞サブセットの相互作用を明らかにする研究が多数報告された。



シンポジウムで講演する松本教授。
当科で進めているRAの最新研究内容も踏まえた内容を講演されていた。

松本教授は、日本臨床免疫学会 (JSCI) の主催するシンポジウム「Therapeutic Strategies Based on Immunological Pathogenesis of Immune-mediated Disease」において「Treatment of Rheumatoid Arthritis Based on its Pathogenesis - The Relationship Between

Late-onset Disease and Regulatory T cells」という演題で講演を行った。私は3年前、昨年に引き続き3回目の本JSCIシンポジウム参加となったが、年々会場が広くなり、また聴衆も増えており、本シンポジウムへの関心の高まりを実感した。佐藤助教は「Role of T-bet in a TLR7 Agonist-Induced Lupus Mouse Model」、私は「LL-37 Induces Inflammatory Signatures on B cells via Unsaturated Fatty Acid Metabolism in Psoriatic Arthritis」という演題でポスター発表を行った。それぞれの研究成果について多くの参加者と英語で討論でき、大変貴重な経験となった。また、JSCIシンポジウム参加メンバーで夕食を共にし、研究内容について意見交換を行うと共に、今後の研究活動に向けて英気を養う機会となった。

本年度の大きな出来事として、当大学が FOCIS Center of Excellence (FCE) に認定されたことが挙げられる。FCE は、臨床免疫学に関連する複数領域の研究者・臨床医が連携し、教育、若手育成、国際共同研究を推進する FOCIS の国際的拠点ネットワークである。国内では東京大学に続いて2施設目の認定であり、当大学における免疫学研究の国際的発信力を高める重要な契機となった。

今回の参加を通じて、組織病変局所での解析を踏まえた疾患横断的な病態解析の重要性を改めて感じた。空間解析などの先端技術を臨床検体・患者情報と結びつけることで、自己免疫疾患に共通する病態基盤や新規治療標的を見出すことが今後さらに重要になると思われる。今後は、FOCIS Center of Excellence としての国際的ネットワークも活用し、科全体で基礎研究と臨床研究を橋渡しする translational immunology 研究をさらに発展させていきたい。



JSCI シンポジウムの参加メンバーとの食事会。
各大学のスタッフも参加し、大学間の交流も深めた。